毒濃の家果表

三

内閣文庫
和
一八二一六號
二函
六架
冊
(三本)

内閣文庫
番號 和 18216
冊數 8 (3)
函號 200 68

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

日本政府図書

内閣文庫

内閣文庫

新古今集寄濃の宗祇少と三乃歌

賀歌

文治六年女院入内屏風ふ

俊成

少人のをとゝ秋中ほ小菊の露もたらふ年を祈あべし

いとゝ多でゝ〻し親ともめでゝ〻し

春ののぬまそゝ小れん

るゝ年ほ多でゝ〻しの初をとあらべゝ年ほたゝ〻ふるとは

又そのうゝをいつゝもちり

小丞百首歌合ふ

撰改

ぬまそゝ小れゝ〻しの花ふ春をおふあまそゝる春ふ入ぬゝ〻ふ

ふゝ〻しの花ふ春のはふ入梅をふるゝ

ぬる秋でゝ小れと

も古今集の業平歌をもとにしたるあやまりてよみなしつるなり。
はるのみてハ花ぞなどこそいとゞいとゞよ
ゆめ〳〵むとつるふあとせとぬまてハかりとぬ花てハ
うとをするとこそ花ハなけれ。

俊業ノ

君が代とそなる代ともとこそ天下やなる月日のうきりとなれバ
はくじあるこの孫なるも。三の白やまゝ〳〵あゞやゝ
うあらぬをとゝんとんやまるべき。

定家卿

ちはやぶるかみよもきゝもしらぬ世にいとゞ思ふ恋ぞしのはる

ちんでたくし。上皇歌のそさのゐる君が代とあまバ此
道をまもるまもるふ位古神ちさぶるそ君を海ゆり
ゆるあるべしとあるなり。四の白松乃よそひを君
ゆづ絶なり。

八月十五夜和歌所歌合ノ月を秋夜

藤ノ蓮

ちる物の枝もむすこふゆめ〳〵と春ハ来ハ秋のよ乃月
ちる物の枝とむすこの夜ちなくわ。といふ物をうりて。
ちゝ分ちそのの枝を夜ちして。さて〳〵夜とふをバいとゞ
しらせてうり。又枝をもむすこの夜をとある。物ゆの袖を。

ぬべしとこそ思ふ。

一首のこゝろ、今年陸むれば、ひよ鳥むつしかりぬべしとつゆ鳥なくなり。

あの有合ふ書祝　拾改

春日山こゑのみきこゆるのべ思ふ小乃ゑ花ふきあくとハ

出ぬ雪の下枝ゆ花をこりて、ちるぞ思ふといひ、おもむ

へて雪といつゝ、ぬきもれど、都の南といつるこゝも、仏の

用ふくもりでおもといつゝ、たゞ思ふそこそあるべ

き花。こゝといつゝ、あやまりて、ぬ西、そこう人ゝ、ぬびのとハ

ふ。ぬ。ぬ。ぬ

[illegible]

実盛つゝもたせ中[illegible]

[illegible]

うまれしさゝ秋のさゞのきるもじ[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆるさとゝ八月すゝりしゝ人のあき[illegible]

[illegible]

[illegible]

きりぐすなどゝ秋のさゞとゝいひ又きりぐすをいとん[illegible]

みゝなしゝ実国つさの[illegible]

つまわすまつかるゝ[illegible]

女のなすゝりおりゝ[illegible]

[illegible]

今ハまゝゝきゝ世のさゞのゆゑ[illegible]

[illegible]

世のなかゝひとゝ[illegible]

しゝ[illegible]

しとしてつゆとこめぎきてこゝろもとまらず
母の身内のうまれてしづきてそのあるさうとそぶとて
ゆくべきやうあるべきてそしまりよりて今の世ぜの
人のこゝろとつるとつふ組をゆくみどりふそ
つくとむしを訪ねてとふる。

母の身内のうとみるる秋那ふしるる日もと住ゆり
るる雨ふるるそ

定家卿歌

雨ふる霧とまるこゝろはあるこゝろのやどの秋風
ゆくそしらし。袖めぐしたし。　ふるのあゝ小志だし。ふつ。ふさこ
ありと。雲海物ふうてそ。ふるふ。そこふふよる秋しるとこ

いまはそこ霧ふふふふふこゝろさ風海のこゝろのこゝろさまおこゝと
ふふのゆるくふふ物ふ霧ふふ。ふふふふふ物ふ霧ふふふふふふふふ
たまふるふや。　ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
どもふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
こふふふふふといふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

父秀宗身すのうりそのの秋寄風懐旧

秀雄

霧ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ゆくふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

今ぞとひとりかたりつぶやくこしつ秋さ神の寄ぬるとぞ。
いとゝすだくなる。今ハなかり。
母の白ひよ作るる秋法師なるこゑて作るる風の
いさく吹れ秋バ
俊宗つ
うき世ふ今ハあらしの山のぬさ紅葉やあきもじめ
色ぞ出てこし。袖めぞたゝし。　法師ふ嵐ふ
秋のそらうき世よ、あらじ。今ハのぎもと思ひたちて
よみ秋ば浅茅や行まくひのふかくも作く嵐ふ
ゆくべきとゝじめあらんとちるる。
宮内卿秋の母みやうて後秋のころ暮ぬるつき

堂ふとゝりてよとゝ作る
まる秋ふくるよとゝとるあ〜き松風を秋ばや苔の下ふ
色ぞ出てこし。　まれふ来てきぐ人かゝ〜そこ乃
松風の吹るを苔の下ふ秋ばや苔と。
十月ぞ〜のりる色濃ふ海〜沈ぬ大伴心
蓮家のもとゝぬまて時雨のあどのてまひつゝ
てつぎの年れ神かく月。さきの作てこあきとよみ
ゆひて。つゝ〜る中ふ。　左大臣清輝
ゆひあるをりてく歌の夕ぐるむせびもられ上ぞ出ぬ
あるひあるをりて〜とゝひけまてるまり。　とれがてこみ

ハぎりとまりてしかくこそ。

雨中、無常

あきさへのうてこそ人をやもとづるなれ　ぬれぎぬ

秋雲を雨のそこなりとて。又神二句ハぎりとまりてしかくこそ

乃ちのそこをもかねもつてなり。ふるを秋ふるまぎれなる

あまのしぶきもまぎれぬ。ちぎりねばこそとたのみをかけ

いつるをこそ。ぶつこそあるなり。詩句を。秋雨をしるをハ

をくれぬどあり。

性中納言通宗の母うち物語ふる秋雨の作か

けつのそこ　俊成卿

かぎりもあきあるかりのやどのあれもいまはぬるさじと歌きこゆ

通宗つね。光俊卿なる歌人。　ほどのとりひろもつてとりつる。

をもかりて。ぬれぎぬ。　詩句をとりをもて。

かへし

雨中無常　秋改

うへ　なほふやぞまさぶれぬるかたもそこもつもれる世にしれ

ぬれぎぬ。　若紫をもしるあまの袖なれぬるあるを

をのうちふやぞまさぶるかたもなぎ。　こゝ後

とゝ人の長れどもの水ぬるあり。　やぞ。その

まふちり。　海ぞこをハ乃長乃もとをもとをもとをもく

あるをとゝ。

無きのこと侍るな

きのふまこと人をいふとあどろきぞれたるまぶぞろ
三ろ白どもどもとあるをハひぐるまりだろもたもの
ぶ。きのふまで世ふろ人のうちまくなりしる
ちどこハうとあどろきぞうもおかえこそきさを
とうびぎうこの長ふまるひあるよとも世の長
仏殿の祖ふるる。あどろきぐひひて牧きて九美と
いつるあもしろ。人をいつるだもどろうこハ
人のうへをどのうこうあり。
ぐうもぎうみいうあぐぎ雲の分りこの夕ぐ孔あ中の明ぐの

無園大僧正

多ぐぐうこ。二の白ぞきれうり。夕雲の嶽そもふ
雲の孤あり。ふうこ物ふいうあぐぎうひうるも。
まぐ来久しきやうもすまバ世ふ人しうこのゆ雲あ
長の嶽ふ老うぬとうの多ふといつるハおひうしうといつる
まぐいぐ人しきふのぐうもあり。いつねぐぎうふぐ世あうら
うふ明るもうぬうしあうもや。
うあうといつぐあうまうしうぐうこうを人をまうすれバぐうひり
牧き学ふあううまうしうぐあもう人まうぐおううもあうと
みうるうめあうあ陽しうぐといつをうを人の世みあうバと
あうあかくあうんと。幸しうれうあひまうをみう。

○天保九年の頃の三の巻

この歌の二句目ばかりもじ八字のごとくかれり。況
人々あゝまゝしづとたゞ
自のことにて。歌も詠ずるなり。
芳のかの天蓋をふいつゝあるべきことあるべし。
前冬條教長卿ふこもり居て作るゞ病の
ぎりふまりぬとまことに教補つまりるとまるべ
小弟博うりぬとまことはたらしるる

家蓮

歌書教補つ歌あるつゝ
初書教補つ歌あるつゝ
神自きて行てのこと

あり。もづゝ今の祖をうばゆきてとしづでまとまるかきて
とひつる方一。　男の毛つまはぶりノとりしたふ
ごりのことあゝべ一。

たゞく事作る人をゞと作る歌ば

西行

あゞ歌ともかゝ初もふかゞるといとれぬべきことひてそはゆん
神自ことしたゞやゝいつそこゝとはそてるのこもるこ
ゝ歌ゞ先ゞ作ゞくもこのたゞ歌ゞうゝあゞとやこゝる。
歌ゞ歌ゞ先ゞ作ゞ。神自を口の自へうけて作ゝ
たゞるれゞいゝれば二の自へつゞきて詠ゞるゝや。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いつのあさぢはつかなりとあるを。　元もとつるぎ。
ふるあめのそそぐ。
はりとるもとれあつまるをたのもしるべの山ぶきをこぬうれハ
みんでぐるし。

鄙しらぬ　俊宗

かりそめの旅のまくらもとゝまれどむらさめ過ぬそぐあね
ぬぐぐるし。　かりそめの旅とゝ一つぐるまくらぬ時ハ
うき旅あり。又かりそめのとゆて旅のあるとゝ時ハ死ぬる
なのふむしくるいふく花ハとゝあ花ハさとゝゆのあるなり。
夢ぶかふ。さをあのくるのぐ。　旅の旅ハ人をえ

そぐぬあふ。旅をとゝえとぐめぬるなり。

定家卿ヨ

えぐぐるし。　泊めぐるし。　二三の白ハ文ことと人とあるを
かぐるし。今ゝるゝ。　花ぶるゝ花ぶかりそこと人
花ハ花ハやどるゝとあり。　かゝるふ。ゆめぐひふかり。ゆり
きるかゝふ。神をたぶりつゝ。　一首のそこ文ことと人とゝ
らひをあるゝ。花ハかゝゝとゝ。今ゝるゝ。ぶりあひて。
ゝのれをゝしむ。花ふ。やど花ふる月ハ紅をぶりとする
あるゝなり。　ゝのれゆくゝ人のぶゝそぐ。ゆるあり

[illegible]

霸旅歌

寄花恋　紀貫之十首、歌十首

俊成

[illegible]

二の白のぬぎ[illegible]

[illegible]

[illegible]

波の事を後つゝ世のせとゝ成ふむとひくゝゝとゝ
枝の結あゝ枝ゝ。　或抄ゝ。ゝゝゝゝとい
ゝるゝゝいひけゝるゝとゝゝゝゝゝゝゝゝは。
たゞゝゝゝゝゝゝゝゝ神のゝゝゝ。

家隆卿詠

神ぶゝの霧浦ゝの流ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。　旨やゝれる月影の。
神ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てすまふあしでたぐ伊とまくさのまくすまくらを
いふもずきびにずけびあじのたぐひなりぞまそびを。
まをひと書るおい伊ちうわ。
月又ぐと髪うて出ーあたるのくとやこそひ神ぬうまくらん
あたるまくうーけふ月又でるぐひふおもひそむと髪う
おまくーくとこそひうぐでとくーあるまくてくれもお
あて神ぬうてしむうとく。

又十首歌をりーー何　家隆卿作

あけぶ又こぬぐまくの岩ちの末や宇り月の末のたうー雲
先ぐでとくーー。　白雪のふかもじをそくーそ不

へ上句をたぐ雪てーんれぐべーー。　雅経

ぬまくまくのうーの面氣さそひこと月ーぐ髪ちるまくのやふ
先ぐでくーー。　ちのまくーーまでの面氣ハ月ふうーぐ
ごとくそ伊のあもうぐーハ月のまくーまくぐ意し
まくれぐふ今日の面氣をまくそひまくぐんやまくく。
伊東中山まくやの中山ふるれぐとまくまの伊ふまりて
ハ東のくまくをこむうるけまくさまくの中山とまめうと今ハちぐ
て伊いまくまりー。　ここ

和歌所月十首　寄金の須ふ月前恋

ことばをつゞけて出したる面影もこゝろ
三日の月の面影の有なるもあるべし
人のうへ月もあり　さてはの白雲をとゞめさりとも
もとゝもとゝまれいせじ　ゆひもしとゝまるべし
さ紅ど中紅ゆしあるべやうまゝ　ぞ
陰のうら　　基家大僧正
あ秋のよもの月のみかゝるむ秋の山ゝる月秋
神々ふ　ゆ　ゐ　とてゝを添へんべし
百首歌をりし一時　　宮秋門院丹後

ゝさるまゝ八十郎の流をくかゝれ頼いきの演義
陰のやうもしゝ　ぐ　ちゝ　ぬ　ゝ　ぬ　ゝ　ぬ　

来の旅ねに又今いくとせかすみ。南ぞ天よりも。
代をかさねて。とりもあつまる。　二三の花ぐさ。
いとゆかしくひらけてふかあらば。二の日より詠ひつづけて。
松のねのたゆまぬ千年の後の世よりも。秋いろもあらぬ秋にあはの神たち。
上の句詠みてとまる。

夕百番歌合

俊成女

かくてしもとあのせばかくあるべきあらむ山路の雪の春乃むしろ
初日のいやはてとぞ。かくてしかるべし。二三の白ゆあら
せばあのうれたくいくあるべきあらむ。
撰歌合　霸中晩霞

定家朝臣

いづくにかこよひ宿をとりそめて夜日と共に旅の空なる風ふ
詠ずるまぼろしとぞ。

旅人の

旅人の神ぞうつ〳〵ゆひたばさみ。ゆくすえ
秋風ふく日ぞ。おのづからとまるべきものぞ。
ふるさとの白ゆふ三の白ゆふ。旅人の袖
もみぢ。やうやうにて。あるべきあつめて。
ちぐさの秋風の。ふりかはらず。

中納言隆房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神白ともじ一字をくべてゐる事あるべきこと。
二三の白小枝をうゑしぶりの夕をふかの吹まの花ぶきの
風が形見とて花のうつりもあるはしら
ちつて。ゆめ〳〵とこそ思ふより所なのうつりすぎ
物をきりしりのそのみ下ぶをいとゞ
思し。　小野のしの原ふかゝもあれどもおし
なべてうゑしらぬ。

雅經

いづくまたうや濃谷の夕ぐれ星ひかりあるを近の山
いとゞたづたし。　いづくまたうや濃谷の夕ぐれ星

そゝりまうばかりとうるべきこと。秋の山のうつりぎり
もてそ。ぼとゝぎすしのぶでもとゝふいまるも。
夕ぐれぶりの花をうゑぶかの夕ぐれ
なほ歌の花をもていつるかるこの山のうつ
ちつ。たるまもの。

宜秋門院丹後

秋をもとめあまつそらもそゝぎ花のうつりぎりの
夕ぐれ。　なほ歌の花をもていつるかるこの山
ちつ。ぼとゝぎすしのぶでもとゝふいまるも
まつ。　天徳内裏歌合の歌。

国立公文書館
National Archives of Japan

先づ〜〜〜〜。祖もめでたく治とをさめの人へ
と、或物よみてうのれば、ゆきとゝやど秋どうくまたりとい
へることゝさとりあり。又ものよりゆきとるさかりのある
じのことゝあるべし。さて八月の白とり人合よろしきさ
まり。人を殺すとハゆゝしきものゝ必やどるべきを殺
ゆゝとしてゆゝとる事。

霸中夕　長明

秋とて山づ秋の景ふらぬ所ゆくをぎりれゆくをぎりの夕景
三の白らぎ〜〜〜〜とて〜〜〜〜ぐれらかゝるゆゝ人
などの秋ある人のうつをゆひやりてよめるやうなし。

ひぐ〜〜〜。此の白もゆきとゝまるとゝやどさぐもとゝ
ゝとゝゝゝゝ秋どゝとゝ手かぎりとゝゝゝ。
こゝゝゝゝ。

あのうつゝ人海ゝりる道ゝゝ作る

民約の撮範

道のべ乃ゝのゝ秋ゝ弱ゝゝ秋ゝゝ
秋ぐ〜〜〜〜。三の白祖めでたし。此人ゝ伝西ゝる
ゝりゝゝゝ平治のゝぐ秋ゝ毎いとゝゝゝゝを
ぐめゝゝゝ。ゝのゝ流ゝれゝぐゝるゝのゝ。
法師ゝ場基法師ゝ祖ゝゝ秋ゝゝ秋を

猶のこりつゆ[illegible]ゆくとあるは弱[illegible]
らへ[illegible]たし。

秋の山

秀能

はつ〳〵ぬぶ秋の旅路をふれそめ[illegible]
はの白雲の松ふかき[illegible]
しかもとゆくもひやう〳〵[illegible]

拾遺抄 合歓 秋 旅 定家卿

[illegible]
[illegible]

神白山のこと

おもへばくるしきほどふいそぐこゝろもまどやとおもふ
ゆくこゝろを[illegible]人の[illegible]
中こゝろふかきこゝろ[illegible]
二の白雲とこゝろ[illegible]
たゝるとゆふ[illegible]
妨とる秋だにあはぬ[illegible]
旅といふ[illegible]

百首[illegible]

[illegible]

まことしやかにもてはやしあのまことをうかがはせぎり
しかぜ一番の七浦より拾はれぬるとのことあり。
但し二の句一番八もろともあらしぬとしてまことをぬ
とらつるたそかれうみしばさ拾どちぎりねどしらる
まて。紙はなしつるも。

　　ふ又百番歌合ふ

あたらふるものめしし人ぞ来の松まつら舟に神ふ波やこたん
　　ト白と。ものをまちつまびく神ふ波
乃ちぎるむとしてまつるり。　恋白心やうりぬるん
とてやしよはれども。ものをあらぢ来の松とおける

波つ舟をかなとねて波こすとみるも鞆ふ
て波こたハたで波のちぎるをいつまつと浮舟を波こ
ゆるて後ともちでまつ来の松ちんちのこひしぶ。
三日の白八波ふよ拾ぶどこをとるる。　二月白人
とつる。ものもじまて波を流すこもれり。

　　入道宮の宴白家百首歌ふ撰のこと後年

　　俊成

敷波人あしたく御ふ神のちすぐろふ
　　ぬ。　あしたくやふすとこをよ
むハ方年千ふ人あしたくるすしたぜ

こゝとあるふるまひすゝこゝハ蝶（スヾ）たるまいとまり。
こゝの夢さめてその蝶をすゞろあとしひらけこと。
ふるまひ物ふすゝ八幡の孫作とこゝろんとこゝ。

述懐百首　夢小猿

世中ちうきふゝ　ゝ　ゝ　

けしきふ

定家卿

神かけさぶる桜ばの夏もこぐ舟かよふ浦風
なんぐ〳〵　さぶるとは夏もえんぐ〳〵とをもうねて
あ〳〵ともうていふのもさぶるなつのうんぬ風ふくこと
いつ之ぐ舟ぐこと夏ぐと夏ぐ人ぬ千ぐ舟ぐ
吹まる風ぬまだぬ神ふこ舟ぐ
きぐぐと〳〵　ふるぐと神ぬ同じ　但し
頃ぐ夏ふ夏ぐ浦なくハ見ぐ
より風ぬふくぐ　あるみうぬ　ぬうぬぐ

家隆卿

撰ばする夏ぬ夏ぬ山ぬ夏ぬ山ぬ夏ぬ山ぬ夏ぬ人ぬ
ぬ白ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬ空ぬあぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

清正卿

定家卿

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

のふぢひさしおもしろし。　うつの山ふもとなる
よりかたこと伊勢物語の詞ふまえり。

長明

神ぬしとはかれたる人ぞうらめしやうつの山ごえ
下句祖父なり。　身をかくしたる人の孫をもとしるる
ものかくあまとてとをるぬるる。　ほの白ふ新の神ふか
うるあなをもとめ入らばと問ふるもやと問ふるこ。　けて
中歌仏の孫の祖母　うつの山ふもとなる。

慈圓大僧正

高山秋四人の神をとりよまるる指をとぐまざりうるを

秋四人とは秋のはてに四人あり。　神をもとめ入るに神
の名の源をもとめ入るこをいふるを。　何のるる人歌。　下句八
この神社系ふ[illegible]ぶ八まの指のもみぢをもとめ入
流りりてとしてとをもとぐ紅ざりりとしるこ高山や
しるるを。　下句八[illegible]　又神をもとめ
るを。たぐ流のおるるこの葉きりとそ紅ふくら
ぶをもだぶ白八秋のうずまあ[illegible]ぶとしてとをもとぐ[illegible]
る時八まの指とをしるぶ。　ろくそくそもぐ可毎のあへらひ
をもとめ入りり。　秋ふのそ[illegible]
東の方へ海のりる時　あり。

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan